

社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

代表者氏名 (ふりがな)	岡林 春雄 (おかばやし はるお)	所属	山梨大学教育人間科学部
連絡先 (電話・E-mail)	甲府市武田 4-4-37 山梨大学教育人間科学部学校教育講座・心理学 (oka@yamanashi.ac.jp)		
研究集会等名称	社団法人日本心理学会・ダイナミカルシステム研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 24 名 (うち認定心理士 2 名) 非会員 6 名 (うち認定心理士 0 名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 実施内容： 日本心理学会第 76 回大会 (専修大学、9 月 11 日) において、 WS031 「異なるモダリティ間の齟齬が造り出す身体：心理学への DSA 新視点の導入」 を実施。郡司幸夫氏 (神戸大学大学院) から「部分と全体」の話題、理学研究の立場からの「コトとモノ (潜在するものとしてのコトと実現されるものとしてのモノ)」の関係、Reynolds(1987)の boid (ボイド) に象徴される群れ研究から (バラバラに動く 対同一方向に動く)、近傍を考え直す必要が指摘され、モノとコトのぶつかり合いが「ゆらぎ 対 協調」を生み出し、トーラス、ヒステレーシスといった現象を生じており、そこから、「受動的能動 (例. ダチョウクラブ)」と「能動的受動 (例. “May I help you?”)」があり得ることが提示された。さらに、[アリ] の生態から、一個の立方体「コト」と無数の知覚表面「モノ」との相互作用 (重ね描き→ほどほどの実在論) を通して、動的重ね描きは結論だけではなく原因であり、異なるモダリティの齟齬こそが記号創発を起こすことが示された (トビイロケアリ)。 指定等論者ならびにフロアーとのやりとりがもたれ、1. 身体化と意識、2. カオスとオーダー、3. 身体と環境は分ける必要があるのではないかと、といった討論を行い、盛り上がった。 指定討論者は、中川正宣氏 (東京工業大学大学院)、鈴木平氏 (桜美林大学)、司会は岡林春雄 (山梨大学) であり、参加者は延べ 40 人であった。</p> <p>成果： 上記ワークショップは、ダイナミカルシステムを考えるうえでも重要な意味をもっている。アリのような社会的動物 (社会性昆虫) は、人間の社会的な動向を研究するうえでも面白い比較対象になってくるので、ダイナミカルシステムという観点から人間 (とくにその発達) を考える際、ぜひとも必要な知見となるであろう。今後とも、自己組織化、非線形、入れ子構造になった因果関係論など、これからの心理学研究になくてはならない発想を研究していきたい。</p>		